

研究

食事を楽しくないものにする要因の検討

—新宿区乳幼児食べ方相談記録の分析から—

富田かをり¹⁾, 高橋 摩理¹⁾, 内海 明美¹⁾, 矢澤 正人²⁾
 関谷紗央里³⁾, 五十嵐由美子⁴⁾, 宮内 恵⁵⁾, 平川 知恵⁶⁾
 石崎 晶子¹⁾, 石田 圭吾¹⁾, 弘中 祥司¹⁾

〔論文要旨〕

目的：食べ方相談を通じた育児支援を充実させるため、親子にとって食事を楽しくないものにする要因を検討した。

対象と方法：食べ方相談に訪れた母子349組の記録を後方視的に解析し、月年齢、主訴、授乳様式を独立変数、親の楽しさ、児の様子を従属変数として、ロジステック回帰分析を行った。

結果と考察：「時間がかかる」、「ため込み」、「食欲がない」という主訴は、母子ともに食事を楽しくないと感じる要因であった。また「夜間授乳あり」は、児が食事を楽しくないと感じる要因であった。食べ方が親子の心理に与える影響をふまえ、相談においては、口腔機能の評価と指導のみならず、生活リズムなども含めた包括的な指導が必要と考えられた。

Key words：乳幼児、食べ方相談、食事の楽しさ、要因分析

I. 緒言

乳幼児にとって、食事は生命維持や身体の成長に必要な栄養・水分を摂取するだけでなく、食べる機能を獲得・習熟していく機会でもある。それと同時に食べる、食べさせるという関係を通じて保護者や養育者との間に心の絆が生まれ、信頼関係の構築や愛着の形成に発展していく¹⁾と考えられている。このように乳幼児期の食事が心身の発達において重要な意味を持つことは社会的に広く認識されているだけに、子どもの食事に関して不安を感じる親は多い。全国の幼稚園・保育園に通う幼児の保護者を対象とした最近の調査²⁾で

は、食事に関する心配事の有無について53.8%が「ある」と答えている。東京都内某区の保育園健診時の保護者対象のアンケート調査³⁾でも食事に関する疑問や不安の有訴割合は60%以上であったとされていることから、多くの保護者の関心事であると同時に心配事でもあることは間違いなさであろう。さらにその不安の内容は量的にも質的にも児の月年齢によって変動することが指摘されており、4歳未満の子どもをもつ世帯を対象とした調査では、授乳や食事に関する不安のピークは出産直後と1歳前後にあると報告されている⁴⁾。また不安・困り事の内容では、1歳前半では、「かまない・丸のみ」、「ため込み」などが多く、1歳後半

An Examination of the Factors to Disturb the Pleasure of Mealtime

(2775)

Kaori TOMITA, Mari TAKAHASHI, Akemi UTSUMI, Masato YAZAWA, Saori SEKIYA, Yumiko Igarashi,
 Megumi MIYAUCHI, Chie HIRAKAWA, Akiko ISHIZAKI, Keigo ISHIDA, Shouji HIRONAKA

受付 15.10.1

採用 16.1.28

1) 昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座口腔衛生学部門 (歯科医師)

2) 新宿区健康部健康推進課 (歯科医師)

3) 新宿区健康部健康推進課 (歯科衛生士)

4) 新宿区健康部牛込保健センター (歯科衛生士)

5) 新宿区健康部四谷保健センター (歯科衛生士)

6) 新宿区健康部東新宿保健センター (歯科衛生士)

別刷請求先：富田かをり 昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座口腔衛生学部門

〒142-8555 東京都品川区旗の台1-5-8

Tel : 03-3784-8172 Fax : 03-3784-8173

から2歳で「好き嫌い」、「つめ込み」、「遊び食べ」などが多くなり、乳歯列など口腔形態の変化や精神発達や自立摂食への移行などさまざまな要素が影響し合っ
て、問題が少しずつ変化していくとされる^{5,6)}。食事は毎日のことであり、食事に関する不安や悩みは親のストレスや育児負担感につながりやすい問題^{7,8)}であることから、早期からの支援を提供できる体制作りが望まれる。

東京都新宿区ではそのようなニーズに応えるために、平成20年度より「歯から始める子育て支援事業」として、1歳児、2歳児の歯科健診に加え、個別の食べ方相談事業を開始した。食べ方相談では乳幼児の食事の摂り方や口の機能に不安を感じる保護者を対象に、日常的に口にしていく飲食物を持って児とともに来所してもらい、個別面接で話を聞き、実際の飲食場面を見たとうえでアドバイスを行っている。面接では、食事が楽しくない、イライラするという親の訴えを受けけることもあり、子どもの食事の様子が親子の気分と関連があることがうかがわれた。授乳・離乳期の食事に対する支援は、子どもの健やかな成長・発達のみならず、健やかな親子関係の形成につながるように展開されることが、「授乳・離乳の支援ガイド」の策定のねらいとしても掲げられている⁹⁾。本研究ではそのような視点から、食べ方相談において親子の関わりが健やかに形成されるような支援につなげるため、食事に関する親の不安に着目して個別相談の記録を分析し、親と子それぞれにとって食事を楽しくないものにする要因について検討した。

II. 対象と方法

1. 対象

平成21~25年度、東京都新宿区の4つの保健センターにおいて個別の食べ方相談を受けた502名の乳幼児とその保護者のうち、食事が楽しいかどうかの質問に回答がなかった69名、および児の様子、親の気持ちの少なくとも一方に「わからない」と答えた84名を除外し、残る349組の親子を本研究の対象とした。対象児の属性を表1に示す。なお本研究では児とともに来所した保護者は全員児の母親であった。

2. 調査方法

調査方法は、相談に先立って保護者が記入する相談記録票の質問項目(図1)、および相談時に面談内容

を記録した評価用紙を後方視的に解析して、児の様子から児が食事を楽しいと感じているかどうか(以下、児の様子)と親が児との食事を楽しいと感じるかどうか(以下、親の気持ち)について、以下の項目を検討した。

1) 「児の様子」と「親の気持ち」の関連

相談記録票に基づき、「児の様子」について「楽しく食べている」(以下、楽しい)と「あまり楽しんでいない」(以下、楽しくない)の2群と、「親の気持ち」について児との食事を「楽しく感じている」(以下、楽しい)と「あまり楽しく感じていない」(以下、楽しくない)の2群の間の関連を検討した。「児の様子」と「親の気持ち」の関連の検定には、カイ二乗検定を用いた。

2) 「児の様子」、「親の気持ち」と相談内容の関連

相談記録票の主訴(気になること)をさらに相談時に確認し、記録票の「その他」の内容を聞き取ったと

表1 対象児の属性

| | 0歳 | 1歳 | 2歳 | 3歳 | 4歳 | 5歳 | 6歳 | 計 |
|----|----|-----|----|----|----|----|----|-----|
| 男児 | 26 | 106 | 44 | 6 | 0 | 1 | 1 | 184 |
| 女児 | 27 | 107 | 26 | 3 | 1 | 1 | 0 | 165 |
| 計 | 53 | 213 | 70 | 9 | 1 | 2 | 1 | 349 |

| 氏名 | 男・女 | 第 子 | 生年月日 | 年 月 日 | 歳 月 |
|--|-----|-----|------|-------|-----|
| 1. ご家族は何人ですか? ___人 父 ___人 兄 ___人 姉 ___人 祖父 祖母 その他 本人 ☆お子さまについてうかがいます | | | | | |
| 2. お子さまの生活リズムについて 起床 _____ 時頃 就寝 _____ 時頃 朝食 _____ 時頃 昼食 _____ 時頃 夕食 _____ 時頃 | | | | | |
| 3. 授乳について a. 母乳を飲んでますか ・はい (回) ・いいえ () b. ミルクを飲んでますか ・はい (回) ・いいえ () c. 夜間に授乳の習慣はありますか ・はい (回位) ・いいえ () | | | | | |
| 4. よく食べるおやつは何ですか () () () ・食べない | | | | | |
| 5. よく飲む飲み物は何ですか () () () | | | | | |
| 6. 現在使っているものに○印をつけてください ・は乳ビン ・コップ ・ストロー ・お椀 ・トレーニングカップ ・歯ブラシ (ゴム) ・歯ブラシ (ナイロン毛) | | | | | |
| 7. お子さまの口や歯のことで心配なことがありますか ・特にない ・むし歯 ・歯の生え方 ・噛みあわせ ・歯ざり ・歯みがき ・おしゃぶり ・指しゃぶり ・その他 () ☆お子さまと保護者の方についてうかがいます | | | | | |
| 8. ① お子さまの食べ方の様子 a. 楽しく食べている b. あまり楽しんでいない c. よくわからない ② お子さまの食べ方で気になることがありますか a. 特にない b. あまりかまない、丸のみする あまりかまない食べものは何ですか () c. 時間がかかる (分 / 1食) d. 飲み込まない、口にためる 口にためる食べ物は何ですか () e. 好き嫌いが多い 嫌いな食べ物は何ですか () f. 吸うようにして食べる g. その他 () ③ 果物やおにぎりなど手づかみ食べをしていますか a. よくする b. あまりしない c. ほとんどしない d. 食具を使って食べる () ④ 保護者の方は、お子さまとの食事の時、どの ように感じていますか a. 楽しく感じている b. あまり楽しく感じていない (理由) c. ふだんは一緒に食事をしないのでよくわからない | | | | | |

図1 相談記録票の質問項目

ころ、相談内容で頻度が高かったのは、①「あまりかまない、丸のみする」(以下、丸のみ)、②「時間がかかる」、③「飲み込まない、口にためる」(以下、ため込み)、④「好き嫌が多い」(以下、好き嫌い)、⑤「吸うようにして食べる」(以下、吸い食べ)、⑥「つめ込み」、⑦「食欲がない」、⑧「じっとしてられない」の8項目であった。児の食べ方が食事時の親子の気持ちに関連しているかどうかを検討するため、「児の様子」、「親の気持ち」を従属変数とし、性別、月年齢、上記の①～⑧の主訴の有無を独立変数とし、ロジスティック回帰分析を用いて関連因子を抽出した。

3) 「児の様子」、「親の気持ち」と授乳様式、甘味飲料の摂取の関連

相談記録票の設問から、現在の授乳の有無とその様式、夜間授乳の有無、甘味飲料の日常的摂取の有無と「児の様子」、「親の気持ち」の関連を検討した。授乳の有無とその様式については、母乳を飲んでいるか、ミルクを飲んでいるか、夜間授乳、甘味飲料の日常的摂取についてすべて有無の2項評価とした。母乳の有無、ミルク哺乳の有無、夜間授乳の有無、甘味飲料の日常的摂取の有無を独立変数とし、「児の様子」、「親の気持ち」を従属変数として、ロジスティック回帰分析を用いて関連因子を抽出した。

4) 「児の様子」、「親の気持ち」と手づかみ食べるの関連

相談記録票の手づかみ食べに関する設問に回答の得られた345名について、手づかみ食べを「よくする」、「あまりしない」、「ほとんどしない」、「食具で食べる」の4群に分け、「児の様子」、「親の気持ち」との関連を検討した。検定はカイ二乗検定を用いた。

3. 統計解析

統計処理は、SPSS 22.0 for Windows (IBM) を用いて行い、すべての検定において、 $p < 0.05$ を有意水準とした。

なお、本研究は昭和大学歯学部医の倫理委員会の承認を得て行われた(承認番号2013-006)。

Ⅲ. 結果

1. 食事に関する親子の感じ方の関連

「親の気持ち」、「児の様子」のクロス集計表を表2に示す。相談に訪れた親の34.1%にあたる119名、また児の25.5%にあたる89名が、食事を「楽しくない」と感じていた。両者の気持ちには、強い関連が認めら

表2 児の様子と親の気持ちの関連

| | | 親の気持ち | | 合計 | p 値 |
|------|-------|-------|-------|-----|--------|
| | | 楽しい | 楽しくない | | |
| 児の様子 | 楽しい | 210 | 50 | 260 | .000** |
| | 楽しくない | 20 | 69 | 89 | |
| 合計 | | 230 | 119 | 349 | |

χ^2 検定, **: $p < 0.01$

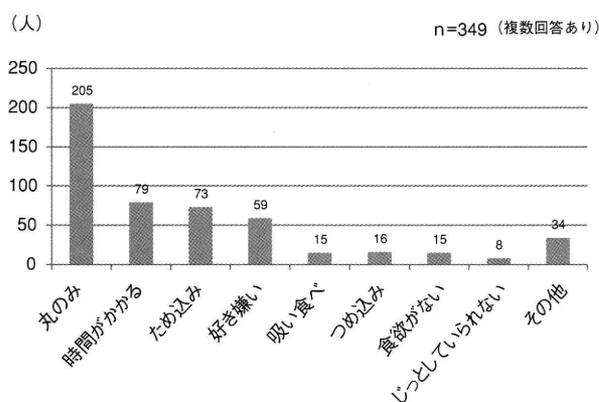


図2 対象者の相談内容

れた ($p < 0.01$)。すなわち、児が「楽しい」場合は親も食事を「楽しい」と感じる割合が高く、児が「楽しくない」場合は、親も「楽しくない」と感じる割合が高かった。しかし、食事が「楽しくない」親の数は、「楽しくない」児の数より多く、児が楽しくても、楽しく感じられない親も少なからず存在した。

2. 食事を「楽しくない」と感じる食べ方

対象者の相談内容を図2に示す。最も多いのは「丸のみ」の相談で、「時間がかかる」、「ため込み」、「好き嫌い」がそれに続いていた。相談内容と「児の様子」、「親の気持ち」との関連を表3に示す。児、親ともに食事を「楽しくない」と感じる食べ方として、「時間がかかる」、「ため込み」、「食欲がない」に有意な関連が認められた。「丸のみ」は最も頻度が高い相談内容であったが、「児の様子」、「親の気持ち」との関連は認められなかった。

3. 食事の楽しさと授乳様式との関連

「児の様子」、「親の気持ち」と様式別授乳の有無、夜間授乳の有無、甘味飲料の日常的摂取の有無の関連を表4に示す。夜間授乳と「児の様子」に有意な関連が認められ、夜間授乳がある場合、食事を楽しくないと感じる要因となることが示された。授乳様式や甘味

表3 児の様子・親の気持ちと相談内容の関連

n=349

| 項目 | 児の様子 | | | | 親の気持ち | | | |
|-----------|-------|----------|-------|--------|-------|----------|-------|----------|
| | オッズ比 | 95% 信頼区間 | | p 値 | オッズ比 | 95% 信頼区間 | | p 値 |
| | | 下限 | 上限 | | | 下限 | 上限 | |
| 月齢 | .991 | .960 | 1.023 | .567 | .988 | .960 | 1.017 | .417 |
| 性別 | 1.655 | .946 | 2.895 | .077 | 1.267 | .758 | 2.119 | .367 |
| 丸のみ | 1.192 | .657 | 2.163 | .564 | .858 | .499 | 1.476 | .580 |
| 時間がかかる | .352 | .183 | .678 | .002** | .271 | .147 | .500 | < .001** |
| 吸い食べ | .696 | .200 | 2.428 | .570 | .438 | .145 | 1.323 | .143 |
| 好き嫌い | .916 | .453 | 1.851 | .806 | .655 | .346 | 1.239 | .193 |
| ため込み | .400 | .207 | .769 | .006** | .482 | .265 | .875 | .017* |
| つめ込み | | .000 | | .998 | 1.104 | .294 | 4.143 | .883 |
| 食欲がない | .113 | .033 | .391 | .001** | .048 | .010 | .231 | < .001** |
| じっとしてられない | .276 | .022 | 3.511 | .321 | .000 | .000 | | .999 |

ロジスティック回帰分析, **: p < 0.01, *: p < 0.05

表4 児の様子・親の気持ちと授乳様式の関連

n=349

| | 児の様子 | | | | 親の気持ち | | | |
|------|-------|----------|-------|--------|-------|----------|-------|------|
| | オッズ比 | 95% 信頼区間 | | p 値 | オッズ比 | 95% 信頼区間 | | p 値 |
| | | 下限 | 上限 | | | 下限 | 上限 | |
| 月齢 | 1.025 | .985 | 1.067 | .225 | 1.002 | .966 | 1.039 | .914 |
| 性別 | .769 | .449 | 1.315 | .336 | .807 | .502 | 1.297 | .375 |
| 夜間授乳 | .171 | .057 | .513 | .002** | 1.217 | .517 | 2.868 | .653 |
| 甘味飲料 | .881 | .467 | 1.661 | .695 | 1.268 | .705 | 2.283 | .428 |
| 母乳 | 2.532 | .820 | 7.815 | .106 | .784 | .318 | 1.934 | .598 |
| 哺乳瓶 | 1.823 | .907 | 3.667 | .092 | 1.391 | .790 | 2.450 | .253 |

ロジスティック回帰分析, **: p < 0.01

表5 児の様子・親の気持ちと手づかみ食べる関連

n=345

| | 児の様子 | | p 値 | 親の気持ち | | p 値 |
|---------|------|-------|--------|-------|-------|------|
| | 楽しい | 楽しくない | | 楽しい | 楽しくない | |
| よくする | 202 | 40 | .000** | 167 | 75 | .352 |
| あまりしない | 30 | 18 | | 28 | 20 | |
| ほとんどしない | 16 | 25 | | 24 | 17 | |
| 食具で食べる | 10 | 4 | | 9 | 5 | |

χ^2 検定, **: p < 0.01

飲料の摂取は「児の様子」との関連は認められなかった。「親の気持ち」については、これらの因子のいずれも関連は認められなかった。

4. 食事の楽しさと手づかみ食べるの頻度との関連

手づかみ食べるの頻度と「児の様子」、「親の気持ち」とのクロス集計表を表5に示す。手づかみ食べるの頻度と「児の様子」には関連が認められた (p < 0.01)。手づかみ食べをよくする児では「楽しい」と感じる割合

が高く、あまりしない、ほとんどしないと頻度が低くなるにつれ、「楽しくない」と感じる割合が増えていた。一方手づかみ食べるの有無と「親の気持ち」の間には関連が認められなかった。

IV. 考 察

1. 対象者と除外基準

「食事の楽しさ」といった主観的な問題を検討する研究においては、対象者によって結果が異なる可能性が高く、対象者の選定基準とそれを明示することは重要である。本研究を始めるにあたり、まず個別相談に訪れたすべての親子502組の相談記録票を抽出した。しかし、本研究の目的は食事が楽しくない要因を明らかにすることであったため、食事の楽しさについて回答がなかった65名については除外した。さらに「わからない」という回答の解釈であるが、保護者に対する質問の回答の選択肢は「普段は一緒に食事をしないのでよくわからない」という記述でわからない原因を

特定しており、「どちらともいえない」という意味ではない可能性が高いと考えられた。同様に子どもの食べ方の様子に「わからない」と答えたものも、一緒にいても「わからない」のか、見る機会が限られていて「わからない」のか、原因や内容が不明なため除外した。その結果、対象者は全相談者の約30%減少したが、食事の楽しさに関して子どもが楽しそうかどうか、保護者は楽しいと感じているかどうかについてはっきり回答している者に絞られたため、楽しくない要因を検討するという目的には合致していると考えられる。個別相談では相談記録票記入後に医療面接の形で相談を行っているので、今後、より詳細な分析をするためには回答がないケース、わからないと答えたケースについてはその場で気持ちを聞きとる試みが必要と考えられる。

2. 親子の感じ方の関連

本研究の結果では、食事に関する児の様子と親の気持ちには強い関連が認められた。児の様子はあくまでも親から見た主観的な回答であるので、親の気持ちが少なからず反映されてしまう点是否めない。さらに根ヶ山¹⁰⁾によれば、食事とは食物という対象をめぐる親子が相互の意図を読み合い、駆け引きを行う「共同作業」であり、親子確執の場という側面を持つという。そのため、両者の気持ちが相互作用的であるのは当然ともいえる。離乳食場面の観察で乳児の気持ちや行動を理解した行動を母親が取れない場合は乳児の食行動は進まず母子相互交渉も減少するという報告¹¹⁾もある。負の連鎖を断つためには、個別相談において食べ方、食べさせ方や児の機能に合った食内容という点での具体的なアドバイスも大切であるが、食べ方によっては児との食事そのものを負担に感じているという保護者の気持ちを理解し支援する視点が必要であると考えられる。指導の仕方によっては保護者の食事や育児に対する負担感をさらに増大させてしまう可能性があるからである。大岡ら⁶⁾は保育園の保護者対象のアンケートで、80%以上が児との食事を楽しいと答えていたと報告しているが、食べ方相談に訪れる保護者では66%とそれに比べ低かった。相談に訪れる保護者はその時点で、食事に関する困り事やストレスを抱え、その解決を求めているという点を理解したうえでの指導・支援が不可欠であると推察される。

3. 食事が楽しくない要因

「丸のみ」は最も頻度の高い相談内容であったが、早く食べようとする児と食べさせたい親の対峙であり、目指すゴールの方向性は同じであるため、食べ方に多少の問題を感じても食事の楽しさを奪うにはいたらないと考えられる。一方児が食べることに前向きでない場合、すなわち「食欲がない」、「時間がかかる」、「ため込み」という食べ方は早くたくさん食べさせたい親と食べようとしぬい児の方向性が相反するため、その確執は楽しくないものになると考えられる。村上ら¹²⁾は口にためたままなか飲み込まないという食行動が認められる保育園児の特徴として、食事時間が長い、口の動きが鈍いなど、食べることに意欲的でないという点を挙げているが、そのような様子が、親から見て児が食事を楽しんでいないと感じる要因になっていると推察される。機能的には乳臼歯の萌出前は口腔内で処理できる食物は限られており¹³⁾、嚥下可能な食塊が形成できなければ口にため込んだり口から出したりする可能性は考えられる。硬さや大きさ、まとまりやすさの工夫で、食べやすくなると、ため込みや時間の問題は改善される可能性もあり、無理なく食べられる形態と量の食事を提供することで食事の楽しさにつながる指導が必要と考えられる。

授乳様式との関連については、授乳自体は、母乳か哺乳瓶かにかかわらず親子双方の食事の楽しさに影響する因子ではなかったが、夜間授乳をしていることが、児にとって食事が楽しくない要因となっていた。夜間授乳が続く間は、睡眠リズムが不安定であることに加え、朝の空腹感も少ない可能性があり、食事を美味しい、楽しいと感じる基盤が築かれていない可能性が考えられた。食を中心とした生活リズムがまだ確立できていない状態で、離乳食や幼児食を楽しく進めていくことが簡単ではないことをうかがわせた。一般的に食事の問題は生活リズムを包括的に捉えた指導が必要であると考えられるが、特に食事が楽しくないという親子に対しては、夜間の授乳の頻度と時間帯などを聞きとったうえで、空腹感や食欲を感じさせること、睡眠リズムを作ることへの支援が必要であると推察される。

また、手づかみ食べの頻度と児が楽しいと感じることには有意な関連が認められ、手づかみ食べをすることは児にとって食事の楽しさにつながることを示唆された。手づかみ食べとは「食べ物を目で確かめて、手

指でつかんで、口まで運び口に入れるという目と手と口の協調運動であり摂食機能の発達のうちで重要な役割を担う」行為である、と同時に自分でやりたいという欲求のあらわれでもあり、食べる機能の発達上重要とされる¹⁴⁾。安全面、衛生面に配慮しつつ、手指の機能と口腔機能の発達に合った手づかみ食べを促すことは大切であると考えられる。Ishizakiら¹⁵⁾は経管栄養依存症の幼児が経管栄養を離脱した要因として手づかみ食べの発現がみられたと報告しているが、このことから「手づかみ食べ」は、自立摂食のスタートであり食べる意欲につながる行為と捉えることができる。本研究でも手づかみ食べが、児にとっての食事の楽しさと関連が認められたことから、自主性の芽生えであり意欲的な行為と捉え支援していく必要性が考えられた。一方、手づかみ食べは親の気持ちとは関連がなく、本人は楽しそうだが親は楽しくないという対象者も一定数いた。自由記載欄には「ちらかしたがる」、「手づかみのものしか食べない」、「遊び食べ」という言葉がみられ、手づかみ食べをする子ども自身は楽しいかもしれないが、親にとっては大変と感じている様子がかがえた。この点については、手づかみ食べの意義をよく理解してもらうこと、手指の巧緻性の発達とともに食具食べに移行できるので、一時的なものであること、手づかみ食べの食材や形態を選ぶことなどの説明と指導が必要であると考えられる。

V. 結 論

乳幼児の食べることに関する保護者の不安や悩みは多岐にわたり、食べ方によっては親・児双方にとって食事の楽しさを損なう要因にもなり、しかもそれが相互に関わり合っていることが示唆された。食べ方相談においては、口腔機能の評価と指導だけでなく、生活背景や心理的な問題も含めての包括的な指導が必要であることが示唆された。

本研究の内容の一部は、第60回日本小児保健協会学術集会(2013年9月 東京)にて発表された。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 堤ちはる. 子どもにとって、なぜ「食」は重要なのか—「食」を通して育つもの育てたいもの. 月刊福祉 2014; September: 35-40.
- 2) 日本歯科医学会重点研究委員会. 「子供の食の問題に関する調査」報告書. 第2章 子供と保護者への食の支援に関する調査. 2015: 47-92.
- 3) 大岡貴史, 坂田美恵子, 野本富枝, 他. 乳幼児の食事や口腔内の状況に関する保護者の疑問や不安についての実態調査. 口腔衛生学会雑誌 2011; 61: 551-562.
- 4) 厚生労働省. 平成17年度乳幼児栄養調査結果の概要. <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/06/h0629-1.html> 2015年7月30日アクセス.
- 5) 富田かをり, 高橋摩理, 内海明美, 他. 食べ方相談に来所した親子の相談内容の検討. 小児保健研究 2013; 72: 369-376.
- 6) 大岡貴史, 内海明美, 向井美恵. 乳幼児の保護者が感じる食行動の問題点と食事の楽しさとの関連. 小児保健研究 2013; 72: 485-492.
- 7) 田村文誉, 保母妃美子, 児玉実穂, 他. 子供の食事の問題と親の育児ストレスに関する基礎的検討. 口腔リハビリ誌 2012; 25: 16-25.
- 8) 安部裕美, 築城友加子, 横井吉和. 子どもを持つ母親の食事のストレスとその要因について. チャイルドヘルス 2005; 8: 61-64.
- 9) 堤ちはる. 授乳・離乳の支援ガイドについて. 小児科 2010; 51(11): 1411-1416.
- 10) 根ヶ山光一. 食を通した母子関係と子どもの自立. 小児歯科学雑誌 2012; 50周年記念誌: 34-35.
- 11) 脇田満里子, 野村幸子. 離乳食場面における母と子の相互交渉の経時的変化. 奈良県立医科大学医学部看護学科紀要 2011; 7: 16-23.
- 12) 村上多恵子, 中垣晴男, 榎原悠紀田郎, 他. 摂食に問題のある保育園児の特性要因—食べ物を口にためる子について—. 小児保健研究 1991; 50: 747-756.
- 13) 石川千鶴, 岡崎嘉子, 鈴木有希子, 他. 乳幼児の摂食機能の発達に関する研究 第1報 1歳6ヶ月児の現状について. 小児歯科学雑誌 1988; 26: 30-40.
- 14) 向井美恵. 食べる機能の発達とその獲得—手づかみ食べの重要性を含めて—. 臨床栄養 2007; 111: 33-36.
- 15) Akiko Ishizaki, Shouji Hironaka, Masaru Tatsuno, et al. Characteristics of and weaning strategies in tube-dependent children. Pediatrics International 2013; 55: 208-213.

[Summary]

The purpose of this study is to improve the child-care support by investigating factors which disturb the pleasure of mealtime. The subjects of this study were 349 pairs of infants and their mothers who came for feeding consultation organized by the municipality. A retrospective cross-sectional examination was performed by the analysis of the questionnaires collected from mothers. Logistic regression analysis was carried out with pleasure of mealtime for infants or mothers as the dependent variables, and also with main complain, age, feeding style as explanatory variable.

The results showed the factors which disturb the plea-

sure of mealtime for both infants and mothers were such habits as "prolonged mealtime", "pooling food in the oral cavity", "lack of apatite". The sucking at midnight was also a factor which affects the pleasure of mealtime for infants. These results demonstrate the feeding habits affect both the infants and the mothers mentally. It is therefore implied that a comprehensive guidance is required when conducting a feeding consultation to mothers.

[Key words]

infant, feeding consultation, pleasure of mealtime, factor analysis